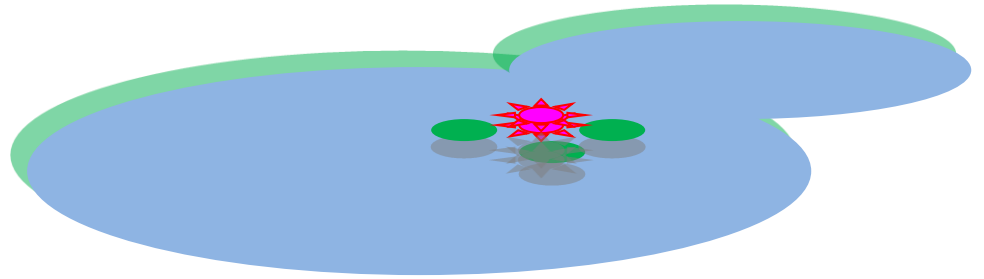


しゅう せん か にっ き
周旋家日記 (3)

それぞれの想い—退蔵院襖絵プロジェクト

乾 明 紀



前号では、このプロジェクトを通じて、お釈迦様が私に「お前はどこに向かって生きようとしているのか？」と質問されているように思えたと書いたが、芸術と宗教は共に、人に生き方を問う。しかも、その問い方が奥深い。慣れ親しんだ日常や習慣を疑うことが必要となる。さらに、芸術と宗教は、商業活動を凌駕したところにその価値を置く。

傘屋卸問屋の四代目として生まれた私は、「商い」の世界こそ興味の中

心であった。大学職員時代は、その商いの世界の発想を大学や芸術、まちづくりの世界に持ち込むことで評価を受けてきたと言える。そんな私が大学教員となり、宗教と芸術とを周旋した結果、それまでの悩みが堰を切ったように溢れだしてきた。

本当にお恥ずかしいことだが、新米教員であった私は、芸大出身でないこともあり、3年間ずっと「自分は芸大生に何を教えるべきなのか」で悩んでいた。実務型教員として、ジェネリッ

クスキルとしてのプロジェクトマネジメント・スキルを身につけさせながら社会と連携したプロジェクトを成功させることが私の役割であったが、自分自身が戴くべき価値をずっと問い続けていたとっていい。

社会でコトを成し遂げるためのジェネリックスキルは大切である。就職にだって有利だ。しかし、社会の当たり前を疑う感性が魅力の芸大生に過度な「社会適応」はさせたくない。そのためにも、芸大生が関わるべきプロジェクトはどのようなものであるべきか。学生の将来に好影響を与える世界観や哲学を、プロジェクトを通じて伝えているだろうか。この悩みが、このプロジェクトの推進と共にどんどん膨張していった。

しかしながら、そんな悩みを抱えながらも、このプロジェクトは内外の期待を受けながら着々と進行していく。私の周旋で企画意図を公表すべく記者会見も開いた。とにかく、このプロジェクトは、震災で落ち込んだ日本に勇気と元気を与えるものにしたかった。

日本の長い歴史の中で不安や問題がないときなどなかった。退蔵院自身が応仁の乱によって、一度焼失した寺院である。今の方丈が建てられた慶長年間には、東寺や伏見城の天守閣が倒壊したマグニチュード7.0の「慶長伏見地震」も起きている。そんな戦乱や災害を乗り越えて京都も日本も、そし

て退蔵院も復活してきた。そして、今、再建後400年の歳月が過ぎ、新たな価値が生まれようとしている。大切なことは、長い時間軸で物事を捉え、次の世代に夢を与えていくことなのかもしれない。

プロジェクトは、夢を託す絵師の公募と選考を残すだけとなった。絵師は、その年の3月に卒業(修了)予定の京都造形芸術大学の学生、大学院生を対象に公募した。退蔵院に匹敵するような古刹ではこれまで、名だたる画家による襖絵の制作や模写による複製はあったが、大学卒業(修了)間もない若者に襖絵64枚もの「大作」を任せる機会は皆無であったであろう。しかも、慶長年間に建てられた重要文化財の方丈の襖絵である。

このような挑戦的な考え方は、松山副住職の意向が大きいことは既に述べた。お寺は人を育てるべきであり、自らが種を撒く存在でありたいとの思いが副住職にはあった。ちなみに、このプロジェクトに際して、寺院側から檀家側へ説明した際の反応は、賛成8割、反対2割であった。この2割の反対について副住職は、この反対意見の存在が、とても大事なことであると言う。なぜなら、誰もが賛成する取組は、既に新規性が無く、やる価値がない可能性が高いからだそうだ。

このような副住職の思いが詰まった挑戦的なプロジェクトの主役とな

る絵師に求められたのは、技術以上に覚悟であった。参禅することの覚悟、住み込みに近い生活で制作することの覚悟、2年間で64枚の襖絵を描く覚悟、将来絵師として自立する覚悟。

絵師公募要綱にあるように、これらを求められた。絵師となれば相当なプレッシャーに耐えなければならない。

<つづく>

妙心寺退蔵院方丈の狩野了慶の襖絵

